

「荒城の月」と二つの「はさま町」

久保田 昌 兌

かつて私は地図少年であった。小学校では日本地図を、中学校では世界地図を眺めているのが好きな少年であった。長じて今でも日本と世界の地理関連の書籍やテレビを見ているのが大好きである。そのような人間が、「水と緑と青い空」の三拍子に恵まれた挾間町古野に居を構えて二十年が過ぎる。この間の思い出はつきないが、こゝでは私のふるさと宮城県と大分県のつながりを二つだけ紹介してみたいと思う。

そのひとつは、大分県民なら誰でもご存知の瀧廉太郎作曲の「荒城の月」についてである。この作歌者は誰であろうか。仙台の旧制二高英語教授土井晩翠である。この二人は明治三十四年に共に留学中（独と英）に、ロンドン郊外テームズ河畔の船中にて初対面である。昭和二十五年に詩人として文化勲章を受けた土井晩翠は、仙台市名誉市民にもなっている。ところで「荒城の月」のモデルはどこであろうか。仙台の青葉城か。会津若松の鶴ヶ城か。はたまた竹田市の岡城か。真相はいかに。竹田市の瀧廉太郎記念館には土井晩翠氏の特徴ある右下さがり字体の真筆コピーが展示されており、その本物は大分市万寿寺に保管されているという。

さてもうひとつの話であるが、それは宮城県迫（ハサマ）町と大

分県挾間町とが同一呼称の縁で、昭和六十三年に交流開始し平成二一年に友好姉妹町の締結をした話である。当時の町報には、両町の小学校や議員の交換交流と三船地区を流れる由布川に友好記念の迫（ハサマ）橋が竣工したことを伝えている。「南のはさま」に対して、「北のはさま」は、仙台平野の北部にあり岩手県に近い米どころである。近くにある伊豆沼は小白鳥の越冬池で有名であり、又仮面ライダーやサイボーグ漫画家石ノ森章太郎の生誕地でもある。

二つの話はこれで終える。

ふり返ると、私は東京で生まれて仙台で育ち、学生時代からこれまで日本全国の全県を鉄道で通り抜けた経歴を持っている。かつての地図少年は、今でもテレビや新聞雑誌を見る時は数種の地図を傍に置いている（拡大鏡と共に）。現在の地図帖やトラベルストーリー物は、実に美しく、くわしく、見やすくなっている。昔と比べたら隔世の感がある。これぞ文明の進歩であり総合技術発展の成果であろう。かくして私はますます地図老人となり、地球はますます狭くなっていくように思えて仕方がないのである。